

ふことでありませぬ、研究問題として自分の考へて居ることをお話をし、之れを此次の御感想談の時に御批評を願ひ、又御研究の題目としてお話を

申し上げた次第であります、是れで御免を蒙ります。
(京阪神聯合保育會雜誌第三十四號所載)

『ピッ プ』の話 (ヂッケンス) (二)

英文學に現はれたる子供(二十七) 〳〵

岡田みつ

「昨夜四人が逃げたのだ。それで鐵砲を打つて皆に知らせたんだ。今また一人逃げたッて知らせてゐるんだらう。」とジョーはこんどは聲を出して言った。

「誰が打ツの？」と僕は訊いた。

姉は裁縫をしながら澁面を作つて、横から口を出した。

「五月蠅奴だ、根掘り葉掘り聞きたがつて。黙つて御出な。空言を吐きはしないから。」

僕は姉さんは失敬だと思つた。併し姉さんはお客の前でもなければ丁寧な仕打はしないのであるから仕方がなかつた。ジョーは、此時に口を大きく明けて、「膨れ」てゐるといふ語を一生懸命に言つてゐるらしかつたので、僕も共に釣り込まれて我知らず姉さんの方へ指して「あの人が」といふ形を口に造つて見せた。ジョーは、其れをてんで取り上げずに、再び口を大きく開いて、力を込めて或る一語を言つて見せたが、僕には何の語とも

判断が付かなかつた。

僕は、切迫せつぱくつまつてかう言つた。

「姉さん、あの……教へて下さいな——何處で鐵砲を打つて居るのだから……」

「まあ、ほんとに此の子は！」「古船ふるふね」で打つたさ。」

「あ……、古船かい」と、思はず、僕はジョーの顔を見た。ジョーは「だから、さう言つたではないか。」と言はぬばかりに、怨みがましい咳拂ひをした。

「古船ツて如何いふ船なの、え？」と僕は言つた。

姉は、針と糸とを僕に差し付けて、首を振りながら、怒鳴り立てた。

「又此子の癖が始まつた！ 一つ物を教へてやると、すぐ十も二十も聞きたがる！ 古船ツて言ふのはね、沼地の向ふにある囚人船の事だよ。」

「囚人船に誰が乗つて居るんだらう。何だツてそんな船に乗せられて居るんだらうな。」と僕は誰に問ふでもなく、圖々しくさういつて見た。姉さんは、胸に据ゑかけたかして、急に立ち上つた。

「よくお聴き、御前が人をうるさく困らせるやうにツて、私は御前を育てたンぢやないよ。そんなものになれば、私が面目ないンだからね。古船に遣られる人は、人殺しをするか、盗みをするか、詐僞じょうごをするかその他種々な悪い事をしてからだ。その始まりは物を聞きたがるのから起こるのだよ。さあ、さつさと寢てしまへ。」と姉はいつた。

僕は部屋へ寢にゆくのに燈火を持つて行くことを許されてゐなかつたから、暗闇を二階へと上りながら——今姉に指拔を投げ付けられた頭部あたまの部分が、痛いまゝに——自分は、その古船に縁があまりさうな氣がしてならなかつた。物を聞きたがつ

た——、今之から、姉さんのものを盗まうとしてゐるのであるから。

其晩、僕は眠つたとすれば、恐い夢を見る爲に眠つたやうなものであつた。自分が、満潮に乗じて河を下つて、その古船の方へ行くところだの、絞首臺の近くを通ると、氣味の悪い海賊が僕に聲を掛けて、早く来て絞首臺で首を縊められてしまへ。愚圖々々するなといつたり、するのであつた。僕は何せよ、夜の白々明けに、食物部室へこつそり行かなくてはならないのであつたから、眠つてならぬと考へた。手軽く燈火を點する工夫がないから、夜中にはとても目的を果すことは出来ないのであつた。

で、眞黒の帳を垂れたやうな窓がやゝ鼠色を呈して來ると、すぐに僕は起きて、階下へ行つた。踏み締める板も、板の破目も皆「泥棒／＼起きなさいよ、御内儀さん」と呼んでゐるやうであつた。

食物室にはクリスマス前なので、平常よりも材料

が澤山あつたが、僕は品物を見定めたり、撰り取つたりする暇は全然なかつた。大急ぎでパンと乾酪と刻み肉とを取つて、昨夜のパンと一所に半巾に包み、ブランデーを少しガラス瓶に移し、其から肉のあんまり附いてゐない一片の骨と、まん丸い充實してゐる豚肉の饅頭とを持ち出した。室は饅頭を持つて行かぬ積りでゐたのであるが、ふと棚の上に登つて見たらば、大切さうに片隅に覆ひのかけてある大皿があつたから、何だらうと思つて見たところが肉饅頭であつた。此二三日のうちに食べるのでなくば、當分は紛失したのが知れまいと考へた、其れをも盗んだのである。臺所から鍛冶工場く續くやうになつてゐる戸口を明けて、僕は工場から鑪を一つ持つて來て、それから以前通りに締りをして、昨夜歸宅した時に入つた戸口から抜け出して、霧の立てこめてゐる沼地の方へ走つて行つた。

霜の深い濕つばい朝であつた。霧が深くて路案

内の指さしの柱も、よく／＼近くまで行かなくては見えない程であつた。いよ／＼沼地へ行き着いてからは、ます／＼霧が濃くて、僕が物に突き當るといふよりも、物の方で僕に突當りに来るやうな感があつた。後ろ暗い事のある人間には、それは随分厭なものであつた。門でも、土手でも、霧の中からニューと出て来て「人の饅頭をもつて行く……あの子を追かけろー」と言ふかと思はれるし、牛までが急に顔を出して、僕の顔を孔の明く程に見入つて、鼻の孔から「こら、小泥棒め！」と息を吐いてゐる。其中でも、一匹が執念く僕を見て、不都合だと言はぬばかりに首を動かして居るので、僕は思はず「どうも止むを得ない譯なのです。自分のものにするツて盗んだンではないンです。」と泣き／＼言譯をした。すると、その牛は鼻から、息を雲のやうに吐いて、尾を一振りさせて後足を蹴上げて、姿を消してしまつた。

もう漸々河へ差し掛つて來た。僕は随分早く歩

くのではあつたが、どうも濕氣が浸み込んで、足が少しも暖らなかつた。僕は、砲臺へ行く路は知つて居た。ある日曜に、ジョーと其處へ行つた事があつて、其時ジョーは、古い大砲の上に腰を下ろして、僕に話すに「今に御前が眞實に己の小僧になつたら、其時は此處へ來て面白く遊ぼうよ」と。今日は、霧の爲に少し右の方へ行き過ぎてしまつたから、河端に沿うて後戻りをしなくてはならなくなつた。それで、骨を折つて、小石だらけの路を踏み締め／＼歩いて溝を一つ渡り越して、もうこの先が砲臺だと思つて、溝の先の土手を這ひ登つて見ると、例の男が目の前に居る。僕の方へ脊を向けて、腕を組んで、さも眠さうに前に倒りかけてゐた。

僕はその男が、思ひも掛けず、急に食物が手に入つた方が、一層嬉しがるだらうと思つて、そつと進んで行つて、肩の處を觸れたところが、その男は飛び上つて僕を見た。……其男は別の人であ

つた!

が、やはり粗末な鼠色の服を着て、足に鎖が着いて、跛で聲が涸れて寒さうな様子は昨夜の男と同じで、唯顔が違ふのと、平ツたい鍔廣の帽子を被ぶつて居るのが相違してゐた。この男は、怒つて僕を一つ打つた。が力の入らぬ弱い打ち方で、しかも狙ひが外れたので自分が釣合を失つて躓き仆れてしまつた。——其から彼は身を起こして一目散に霧の中へ逃げ込んだが、二度ばかり仆れさうになつて、やがて見えなくなつた。あの若い方の男だ!」と僕は思つて、胸がどきとしました。

僕は砲臺に到着して見ると、昨夜の男が居た。

やはり身を竦めて跛を引いて僕の來るのを夜通し待つて居つたかと思へた。僕はこの男が寒さに堪へ兼ねて、仆れて死にはせぬかと思つた。而してその眼が如何にも餓ゑきつて居て、僕が盥を渡したらば其を食物かと思つて口へ入れさうな氣色であつた。併し、今日は僕を逆様に吊り下げもせず

僕が包みを開たなり、衣囊の中のものを取出したりする間、僕を自由にして置いてくれた。

「其瓶に何が入つて居るのだ。」と彼は問ふた。

「ブランデーです。」と僕は答へた。

と言ふ間に彼は潰肉を咽喉へ押し込んで居た。

其様子が食べてゐるといふよりも、大急ぎで物を仕舞つて居るといつた風であつた。少し經つて彼はブランデーを飲まうと、食べる手を休めた。併し身體がガタ／＼慄へてゐて、酒瓶を齒で噛み合せないやうにするのが大骨折であつた。

「貴君は瘡を病んでゐるんでせう。」と僕は尋ねた。

「大方さうだらうよ。」

「この土地は悪いンです。あなたこの沼地に寝てゐた爲で……沼地に居ると瘡りに罹るのですよ。あなたレウマチスもあるのですね。」と僕は語つた。

「まあ死なない内に、早く飯を食つて置くのだ。」

食つてしまふと直ぐに、ソレあすこのあの絞首臺に吊り下げると言はれても構はない。何しろこの慄えるのを止めなくては……」

と言ひく、彼は刻み肉も、骨片も、バンも、乾酪も肉饅頭も一齊に頬張つた。而して、心配さうに四方八方霧の中へ目を配つて、時には嚙むのを止めて物音に耳を澄した。すると、河の方でカチンと音がしたのか、沼地にゐる牛の鼻息がしたのか、何だかよく分らないのであるが、彼はハツと驚いて急に僕に向つて、

「貴様は己を欺すのではあるまいな！ 誰も一所に連れて來たのではなからう？」

「いゝえ。」

「後から來いと、人に智慧を付けもしなかつたらうな。」

「いゝえ。」

「ウン、よし貴様は虚言は言ふまいから。もしもだ、貴様位な年で居て、己のやうなこんな

呼吸をする場所もないやうに、追ひ詰められてゐる不幸な人間を探し出すやうな慘酷な事をするなら、貴様は随分恐ろしい奴なんだがな。」

といつたと思ふと、彼男の咽喉が丁度時計がいよ／＼鳴る前にカチツ……と音をさせるやうにカチツ！と音がして、彼は破れ布子の袖を眼に押し當て、泣いた。僕は彼の心細げなのに哀を催しながら、彼が再び饅頭を食べ始めるのを眺めて、思ひきつて、

「美味しさうに食べますね。」と言つた。

「何か言つたのか。」

「美味しさうですわねといつたのです。」

「さうさ。美味しいな。」

僕は、うちの犬が物を食べるのをよく見守つた事があるが、此人と犬と、食べ方が似てゐるなと思つた。急に、ひどく食ひ着いて、グツと嚙み込んでしまふ處や、誰か横合から饅頭を奪ひ取りはせぬかとのやうに、キヨロ／＼見廻す工合など、

どうも犬をつくりであつた。あれでは、どうも食べても身になるまいと僕は思つた。何か話し掛けは悪いが知らんとも案じながら、僕は、

「ちつともあの人に殘して置いてやらないんですか。もう、此上に僕は持つて來られないんです。」と言つた。

「殘して置いてやる？ 誰に？」と男は咬み碎くのを止めて問ひ返した。

「あの若い人の事！ あなたが話したでせう、あなたと一所に隠れて居るといつた……」

「ウン！ あれか！ 彼の男の事か！ あれは食物は不用いのだ。」と笑聲めく音を出して、彼は答へた。

「だつてお腹が減つて居るやうでしたよ。」

彼男は再び食べるのを中止して、呆れながらも僕を孔の明く程熟視して、

「あれに遇つた？ 何時？」

「唯たッ今。」

「何處で？」

「向ふの方で」と指さしをして「居眠をして居ましたよ。僕はあなたかと思つたのです。」

彼は、急に僕の頸元を引摺んで僕を瞰だらみ付けたから又僕を殺したくなかつたのかと思つてブルブル震へながら、僕は、

「あなた見たやうな風體で、唯帽子は被ぶつて居ました。而して……而してね」と、僕は彼の氣に觸らぬやうに言はうと思ふので「あの、やつぱり鑪を借りたいと思ひさうな譯もありましたよ。昨夜、鐵砲が聞えたでせう。」

「ではやつぱり鐵砲だつたのか……」

「どうしてあなたに明瞭鐵砲と思へなかつたのでせう。僕等の家で聞こえましたよ、こゝから随分離れてゐて御まげに戸が閉め切つてあつたんですが。」

「それは、かう言ふ譯だ、な、お前、こんな淋しい處に獨りで居てさ、寒くて饑ひもしくて氣が少

し變になつてゐるから、夜中鐵砲の音がして、

人聲が聞こえるのさ。いや聞こえるばかりか、兵隊が赤い服で炬火を點して、己のまはりから押取り圍んで來るのまで見えるもの。鐵砲の音と來たら、夜が明けてからでもまだ大砲の音が霧の中でドン／＼して居るやうな氣持さ。」と僕の居るのも忘れてゐるらしく、獨語して居たが「その男に、何か貴様の目についた事があつたか。」

「何だか顔に擦り傷がありました。」と氣にも止めて居なかつた事を、思ひ出して答へた。

「此處にか。」と男は掌で、自分の左の頬をピツシヤリ敲いた。

「え、そこ。」

「その男は何處に居る。」と言ひながら彼は食べ残りの食物を懷中に拗込んで「どつちへ行つたか、方角を教へて呉れ! どんな事をして探し出してくれるぞ、エツ! 此鎖が邪魔になる

! オイ鑪を貸せ。」

僕は、も一人の男の姿の霧に見えなくなつた方角を知らせてやつたところが、此男は一寸立停つてその方を眺めて居たが、やがて濡れてゐる草の上にとかと坐つて、狂氣したやうに鎖に鑪をかけた。僕の居る事も忘れ、自分の足が擦り剥けて出血してゐるのも忘れて木片か何ぞのやうに手荒く扱つてゐた。彼がかう夢中になると、怖くもあり又一方にはあんまり家を長く明けてゐるのも氣掛りなので、僕はもう歸りますと挨拶したが、彼は氣も付かぬらしいので、黙つて抜けて出るが得策だとソツと立ち戻つた。途中で振り返つて見た時には、彼はやはり首を膝の邊へ下げて、せつせ／＼と鑪を使つて居た。

* * * * *

僕は、家の臺所に警官が僕を召捕りに來て、待つて居る事と思ひ込んで居た。併し、實際には、警官も居らず、食物の紛失も、未だ知られずに居

た。姉さんは、今日の御祝の支度に、忙しがつて働いてゐると、ジョーは掃除の邪魔になるとて、臺所の入口の階段の處に追ひ立てられて居た。僕の姿を見付けて、姉は、

「御前はまあ何處に行つて居た？」とクリスマスの御祝儀のかはりにさう言つた。

「御寺の頌歌を聴きに行つたんです。」と僕は答へた。

「さうかい。まあそんなら宜い。……私だつて鍛冶屋の家内でなくてさ、前掛を年中外もしないやうな境遇でなければ、頌歌を聴きに行くのだけれど……頌歌は私や、好きな方なのだが、好きな爲で、やつぱりついぞ聴かれないのかも知れない！」

ジョーは掃除が終はるとすぐ僕と共に臺所へ入つて来て、妻の目を盗んで、左右の人指を十字形に組んで見せて、姉は機嫌が悪いのだといふ意味を知らせた。

今日は、午餐に御客を招いて、珍らしい御馳走の種々をするのであるから、朝食は平常のやうな事はしてゐられないと言はれて、ジョーと僕は牛乳やら、パンやらを無造作にあてがはれて、それをソコソコに食べるのであつた。姉は、用が澤山あつて、御寺の禮拜式には出られないからジョーと僕とがその代理に、衣裳を改め、二人で窮屈がつて出席した。

歸宅して見たらば、食卓の用意が萬端出来て、姉さんも着物を換へ、玄關の戸が御客を迎へ顔に緋りが外してあつた。未だ一言も物の紛失した噂は出なかつた。三四人の招かれた御客が来て、いよく食事が始まつた。僕は、假にあの泥棒一件がなくても、一座の中で甚だ居心地が悪いのであつた。僕は食卓の角の處に座らされて、隣席の客の腕で押されるし、食事中物を言ふ事は禁せられてゐるし、鶏肉や豚肉の一番厭な不味の處をあてがはれるのであるものを！併し其は辛抱すると

しても尙厭な事は、人が僕を打捨つて置いて呉れず、話の題を時々僕の上に持つて来て、いろいろの事を言ふその一事であつた。一寸した例が、食事の際に「どうか一同感謝の心を持つてこれを食べるやうに」との祈りがすむと、直ぐ、姉は僕を見て、小聲で、

「今のが聞こえたかい。有難いと思ふのですよ。」

といふと、ジョーの伯父に當る人が、後を引受けて、

「殊に、御前のやうな、姉の手で育つた者は、尙更の事だ。」といふ。するとハツブルといふ人の家内が、

「何故子供ツてものは感謝の念が薄いうすでせう。」と不思議さうに言ふ。暫時してその良人が、

「生來、悪い性質なものだね。」との斷定を下したので、一同「尤も」と同意して、忌々し氣に僕を見るのであつた。ジョーの家に於ける勢

力は、御客がある時は尙更皆無であつた。から、僕を感めて呉れる方法としては、掛け汁ケレ汁を僕の皿へ入れ足して呉れるより外にないので、今日も一合位僕の肉の上へ掛け添へてくれた。

話が朝の御説教の題の選び方が適當でないといふ事に移つて、「少し目を明けて考へれば、捉へて題とするのに好い材料が澤山ある。此の目の前にある豚肉だつて、宜い例だ。」と甲の客がいふと、乙が「さうとも。子供の利益ためになる説教が出来ると。」合槌を打つ。姉は早速に「よく聽いて御出で！」と直接僕にいふ。ジョーは、掛け汁をまた入れて呉れた。乙の客が又「豚は食を貪るといふ點についても、子供への見せしめになる。貪り食ふ豚が厭はしいやうに、貪り食ふ子供も厭はしい。」などと肉指フキクを僕に突きつけて言ふのであつた。こんな工合で僕は随分居堪たまれないと思つたが、御馳走の數が順に出て、いよ／＼豚肉の饅頭の出る番が來た。僕は食卓の脚を固く握つて、終

生の友だちでもあるやうにそれを胸の邊に押當て、もうこれが運の盡きだと思つた。姉は上機嫌で御客に向つて、

「これから皆さん、伯父さんの御土産を、最後に召上つて下さい。」と言つて、席を立ち「饅頭ゴウトウなのです。豚肉のですね……。」といつた。

一座の客は相當の挨拶をした。姉は其を取りに立ち去つた。甲の客は、ナイフを指に載せて秤のやうにしてゐた。乙の客は「豚饅頭は如何な御馳走のあとでも亦格別なものだ。」と云ひジョーは「ピッツや、御前にも上げるよ。」と僕に言つて呉れたらしい。僕は其時堪らなくなつて、實際、大聲を出したか、それとも出したと想像したのか分らないが、食卓の脚を放して、一目散に逃げ出した。家の入口まで走り着いた途端に、僕は小銃を持つた一群の兵士に、ハタと行き當つた。一人の兵は、手銃を僕に差しつけて、

「オイ此處だ！ 皆來い。氣を付けて。」

と言つた。

(續)

學年末に

幼稚園に學年末といふ語は當らないが、假にさう言ふとして、兎に角く三月になると、何となく忙しくなる。修了幼児に關すること、新入幼児に關すること、過ぎた一年間の仕事の整理、來る一年間の仕事の準備、何といつても忙しい、しかし、それは事務の忙しさであつて教育の忙しさではない。事務には忙閑いる／＼の時があつても、教育にそんなことは決してない。あるべき筈でないし、又決してあらしむべき筈でない。すなはち、いろ／＼忙しいので教育がつい留守になるといふ様のこととは、何の意味をもなさないことであるし、又幼児に對して、此の上もなく濟まないことである。

かなしきは兒等の心になりもえて兒等にまじりてまゝ、
ことをする
——(西山しづ子)——